『　表情から感情を読み取ることを学ぶ子どもたち
～コロナ禍における保育現場の課題～　』

こども保育科　3 年
阿部　綾華　　池田　美羽　　徳武あす美　　水城　凛音　　大塩　尚也

【はじめに】

新型コロナウイルス禍の保育園や幼稚園で、保育者がマスクを着けるようになって一年以上が過ぎた。相手の口元が見えないことで表情を読み取りにくい状態が続き、乳幼児の心と脳の発達に対する影響が懸念されている。実習先でも、マスクがあることにより表情や言葉が伝わりにくいと感じた経験からマスクの下にある様々な表情を子どもたちに伝えたいと考えた。

【連携企業】

ユニ・チャーム株式会社

紙おむつや生理用品など暮らしに欠かせないものをはじめ、マスクやウェットティッシュなどの感染予防に関する製品を多く取り扱っている。また、福祉業界向けに感染予防をしながら口元の表情を読み取ることができる「顔がみえマスク」を開発・販売している。

【目的】

・「顔がみえマスク」があることをより多くの保育者や保護者に知ってもらう
・マスクの下ではどんな表情をしているのか、目だけでは読み取ることのできない表情があることを子どもたちに楽しみながら知ってもらう

【方法】

文字を読めない子どもでも絵本をめくること自体を楽しむことができるように、しかけ絵本を制作した。

タイトル『きになるきになる～マスクのなか～』

絵本制作にあたり工夫した点は、以下の通りである。

・テンポよく飽きずに読み進められるように同じ言葉やしかけが繰り返されるようにした
・絵がはっきりして見やすく、強調したい部分がわかるように切り絵にした
・子どもが親しみを持って読めるように登場人物を身近な人にした
・マスクをしている時と取った時の印象のギャップが分かるように、様々な表情を表現した

制作にあたり、実際に幼稚園で読み聞かせをして子どもたちの反応を確認、現場の先生からの意見を頂きブラッシュアップをした。

【結果】

読み聞かせをした子どもたちの反応としては、次に出てくる登場人物はどんな表情をしているのだろうとワクワクする姿がみられ、表情を予想して発言する子どももいた。

【考察】

マスクで口元が隠れてしまうのは、保育に大きな影響があるが、気持ちや表情を伝える手段を工夫することはできる。就職後もマスク保育は続くと想定されるため、できることは積極的に取り入れ、子どもたちが明るく毎日過ごすために前向きに努力していきたい。

指導教員：髙柳　絵美　稲垣　佑夏里　荒川　琴未